

〈愛の映画をつくるまで〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

うかつにも私はこの事件についてはほとんど何も知らなかったのだが、イタリアで起きた女子留学生殺人事件が欧米で八年間にもわたりマスコミを賑わせていたという。二〇〇七年十一月の事件発生以来、容疑者への有罪無罪の判決が繰り返され、二〇一五年三月に最高裁が無罪の逆転判決を下した。

容疑者は被害者と同室のアメリカ人女子学生で、彼女が「天使」と称されるほどの美女で、事件が乱交セックスやドラッグ絡みだったことと併せて、マスコミは容疑者を焦点にセンセーショナルな報道合戦を繰り返していた。事件に関するノンフィクション本が何冊も出版され、TVドラマも作られ、マスコミは競って狂騒の輪を広げていた。

この映画は、事件のノンフィクション本を基にしながら、主人公は、事件の映画化のためのリサーチに来た英国映画監督トーマス(ダニエル・ブリュール)

という設定だ。事件に群がるメディアの姿は、ひたすら読者の好奇心をあおるタブロイド紙記者、被告の独占取材のために家族を囲い込みサポーターするTVプロデューサー、なぜか警察や裏社会の事情に通じる人気ブロガーら日本でも決して他人事でない(?)し烈というより異常な競争社会だ。メディアとは何か、映画を通して本当に伝えるべきものは何か。メディアのあり方に次第に懐疑的になるトーマス。

トーマス自身も深刻な問題を抱えている。離婚した女優の妻との間で一人娘ビーの親権をめくりもめているのだ。今はロサンゼルスに妻と住むビーとスカイプで話すことが唯一の楽しみであり支えである。

トーマスは映画で単に事件を再現するのではなく、ダンテの『神曲』を基に三部構成の独自の『真実』の世界を描こうと考える。だが、それはセンセーシ

ナルな犯罪スリラーを求める製作プロの意図に反する。決定的な証拠を欠く事件の真相は、どんなに調べてもこれ以上出てこない。絶望状態で追い詰められ、毎夜不気味な悪夢にうなされて、トーマスは、薬物に手を出すようになる。

そんな危機を救ってくれたのは、トーマスがシエナの街のガイド役に雇ったイギリス人女子大生メラニー(カーラ・デルヴィーニユ)だ。長い脚に長い金髪をなびかせて、結構アブナそうな場所にも出入りする情報通。が、授業に出る前にはトーマスのホテルに立ち寄り、さり気なく世話をしてくいく優しさも。まるで地獄でベアトリーチェに救われたダンテのように、トーマスはメラニーの「愛の物語を」という一言に奮い立つ。「そうだ、恐怖や死や殺人の映画は作りたくない。僕は愛の映画を撮る」というトーマスの決意は、自分自身の娘への思いや、娘を殺された被害者の父親の気持ちに添ったものだ。

イタリア犯罪史上最も国際的注目を浴びたと言われる現在の事件を、センセーシヨナリズムとは真逆の『愛の映画』に至る過程として描く。後半登場する人気モデル出身のデルヴィーニユが今の若い世代のいい味を出している。

『天使が消えた街』

英伊西合作映画(101分)

監督:マイケル・ウィンターボトム

出演:ダニエル・ブリュール、ケイト・ベッキンセイル、
カーラ・デルヴィーニユ、ヴァレリオ・マスタンドレアほか
9月5日、ヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国順次公開

© ANGEL FACE FILMS LIMITED / BRITISH BROADCASTING CORPORATION 2014.

